

イアーゴウの嫉妬

——異質なるものへの嫉妬と嫌悪——

三 戸 祥 子

Iago's Jealousy

— Jealousy and Abhorrence against the Foreign —

Sachiko Mito

序

イアーゴウには、その悪を為すにおいて、真の動機はないと言われ、又、半ばそう信じられてきた感がある。コウリッジの言葉、“motive-hunting of a motiveless malignity”が批評家達と観客、読者に与えた影響は、その当時に留まらず、後の時代にまでも及んでいることは否定できない¹⁾。そして、「動機なき悪」、「悪のための悪」という表現が、そのままイアーゴウという人物とその言動を象徴するかの如き印象（認識）の根拠とする考え方も、未だ過去のものとなっていないと言わねばなるまい。

それでは、イアーゴウの悪に関する議論や分析の試みは、無意味なる努力として捨て置かれるのかと言えば、現実是这样ではない。コウリッジ以降二世紀近い時を経た今なお、motive-hunting は終わりを知らぬ様相を見せているのである²⁾。

しかし、イアーゴウの言動に関する具体的な動機の指摘、そして分析、研究という点になると、さほど多くの批評家を挙げることはできない。又、仮に、具体的に指摘をしてはいても、深く掘り下げた分析や解説を試みたものは多くはない。無論のこと、イアーゴウが如何にしてオセローをその言葉をもって、悪（デズデモーナへの不信と嫉妬、そして殺害）へと導き、やがて破滅に陥れるか、その過程を詳細に解説したものは数多くある。しかし問題は、それでは、イアーゴウは何故そのように、言葉と想像力を駆使してオセローを誘惑し、その名誉や地位を、そして愛を、自己にたいする自信を失わせしめるのかと問えば、その理由は十分にはされていないことである。果ては、オセローの命までも捨て去らせるのである³⁾。にもかかわらず、イアーゴウが、オセローから彼に寄せる信頼を徹底的に欺く時、その言動の陰にどのような具体的な動機が潜むのか、その点になると、批評家達は多くは語らないのである。たとえば、M.R. Ridley や Charles Norton Coe は、イアーゴウ自身が口にする動機に言及しはするが、表面的な解説に終わっている⁴⁾。又、ヴェニスという社会において、各々理由は異なるにせよ、イアーゴウとオセローに共通する、政治的、社会的立場や将来に対する不安、“insecurity”を指摘した E.A.J. Honigmann の見方は興味深くはある。しかし、イアーゴウの“insecurity”を生み出すその原因に関しては、上記二人と大差ない表面的な説明に終わっている⁵⁾。更に、“the tragedy of unawareness”という表現によってオセローの悲劇を、そして劇全体の悲劇を端的に表し、明快な作品分析をみせた Bertrand Evans も、イアーゴウの動機そのものに対しては多くの関心を示していない⁶⁾。

一方、イアーゴウの中に人間として為す悪の動機を求めることはせず、劇「オセロー」全体を寓意とみなして、イアーゴウの人物分析を試みる批評家も少なくない。Alvin B. Kernan はそうした批評家達の一人であるが、彼にとって「オセロー」は道徳劇であり、イアーゴウは evil, hatred, disorder といった「悪」の人格化である。イアーゴウは人間の肉体と固有の名を持ってはいても、実際には、人間としての存在ではないのである。彼は、彼自身、即ち「悪しきもの」の対極にある「善なるもの」即ち、good, love, order の破壊者なのである。そして、Kernan によれば、その「善なるもの」の人格化として登場するのはデズデモーナということになる⁷⁾。又、Irvin Ribner は、デズデモーナをキリストと同一視し、イアーゴウを中世以来の神や神への信仰、そして絶対的服従を説く考え方を懐疑し、否定しようとする Renaissance scepticism の人格化と見ている。従って、登場人物を寓意的な存在として考える点では、先の Alvin B. Kernan と変わらないと言ってよいであろう⁸⁾。Bernard Spivack も同様に、「オセロー」を寓意的な読み方をする立場にある批評家であるが、彼の場合は、vice を体現するイアーゴウの対極にあるのは、good や love (といった宗教的な徳目) を体現するデズデモーナではなく、vice の手にかかる人間、“human victim”としてのオセローである。Spivack が、理性の力でもって、己の野心や意図を貫くことに秀でる“Elizabethan commonplace Machiavels”という人物像をあてがうのでは、イアーゴウの言動に見る「悪」の源を十分に説明できぬと考えて、寓意的解釈へと向かったことは理解し得なくはない。しかし、人間の言動の理由を知ろうとする時、或る典型に一般化することのできる名称がなくてはならぬと考える必要は必ずしもないはずである⁹⁾。

確かに、寓意的な読み方の可能性を否定することは、我々にはできないかもしれない。何故なら、エリザベス朝時代の観客の（そして、「オセロー」を描いたシェイクスピア自身も含めた、当時の人々の）置かれている、歴史的、文化的、或るいは宗教的な状況を考える時、中世以来の伝統である道徳劇が、人間を描いた演劇と並行して書かれ、かつ、上演されていた社会においては、人々が、舞台の上にくりひろげられる劇世界に寓意を感じたであろうことを完全には否定することはできないからである。しかし、当時そのような状況が存在していたとしても、その一方で、作者シェイクスピアが描こうとし、人々（観客）が見たものは、そして、より強く印象を受けたのは、そこに登場する生きた人間ではなかったか。彼等の耳に聞こえてくるのは、「悪」とか「善」といった寓意ではなく、彼等自身と同じ命ある人間、感情の何たるかを知る人間の語る言葉ではなかったであろうか。舞台の上に立つイアーゴウやオセロー、そしてデズデモーナは、個としての肉体を持ち、個としての感情や意図、そして語る言葉を持つ人間存在なのである。そうであるからこそ、舞台の向う側で観客として舞台上の人物達を見る時、人々はそこに、自分達にも通ずる人間性を感じ取り、震感するのである。或る時は共鳴し、或る時は嫌悪のあまり震えおののく。しかしそれは、神の教えに歓喜し、恐怖するのではない。生きてある人間への共鳴であり、拒絶なのである。

さて、イアーゴウの言動や動機を作品分析の主たる関心とせず、専ら、オセローの人物分析や破滅の原因追及に議論の大半を与えている批評家も少なくない。彼等のオセロー観は大きく二つの見方に分かれる。一つは、A.C. Bradley を始めとして Wilson Knight 等、オセローの「高潔さ」を賞賛し、強調する立場で、今一つは、Bradley のオセロー像を真っ向否定し、“the essential traitor is within the gates”という表現によって、端的に新たなオセロー像を提示した F.R. Leavis のような批評家達の立場である¹⁰⁾。しかし、そこでひとつ興味深いことは、オセローの高潔さを肯定しつつも、本来、彼の内にある Moor であるが故の獣性、蛮性に言及し、指摘する Dieter Mehl の如き批評家も存在することである¹¹⁾。そうした批評家達にとって

は、オセローをオセローたらしめるのは、“noble, high mind” などではなく、Moor であるが故の野蛮さ、狂暴さである。それは、非文明社会に属する者の共通する本性なのであり、その本性は、人間の本能的欲求である肉欲に関しても同様の獣性を露わにする。劇中、激しい嫉妬に襲われたオセローが、妻デズデモーナの肉体に対して見せる破壊的な復讐の言葉、“I will chop her into messes” (IV, 1, 188) は、西洋文明社会であり、白人社会であるヴェニスとは相入れぬ、蛮族の本性を象徴するものに他ならない。オセローの軍人としての戦役と、それによって勝ち得たヴェニス社会での名誉や地位、そして人々から受ける畏敬は、オセローをしてオセローの本性 “Moorishness” から完全には開放してくれぬのである¹²⁾。そして、こうした立場を徹底して取るのが、Jack D'Amico である。

Jack D'Amico の関心は「人種」の問題に集中している。彼は、劇「オセロー」の最も重要な問題は、ヴェニス社会における白人とムーア人という異種の民族の対立にあると考える。確かに、D'Amico の紹介するシェイクスピアの描くヴェニスの世界についての解説は、歴史的、文化的観点から試みられていて、示唆に富む内容も少なくない。たとえば彼が、当時のヴェニスやローマが歴史的必然性（軍事的、経済的必要性）に迫られて、異質なものに対して柔軟な受容性を見せる反面、ヴェニス社会に本来備わる特質、“social, political, racial, religious, cultural, identity” を強く意識し、己とは相入れぬ、異質なものを拒もうとする閉鎖性、排他性を根強く持っていたことを指摘した点は非常に興味深い¹³⁾。確かに、作品世界や作品の描かれた時代の歴史的背景に関する知識が、作品を理解する上で重要な手がかりを与えてくれることは、誰も否定することはできない。しかしながら、“the question of race” を劇「オセロー」を論じる際の最重要事とし、しかも、「オセロー対ブラバンショ」 という対立構造の中で議論を進めることに終始して、イアーゴウの言動を殆ど顧みることのない、その批評態度に対しては疑問を抱かざるを得ないのである。

以上、取り上げた幾つかの異なる観点から試みられてきた批評は、いずれも、それぞれに示唆を含んでいる反面、イアーゴウの言動や動機に関する分析は十分なものとは言い難い。果して、イアーゴウの「悪」には、Bernard Spivack の言う如く、“objective correlative” は無いのか。それを求めようとするのは無意味な試みに終わる運めにあるのか¹⁴⁾。それをこれから、敢えて確かめていくことにしたい。

以下は、劇中、イアーゴウ自身の口にする言葉に立ち返り、何故、その時、その場においてその言葉を口にしたのか——その時、イアーゴウをしてその言葉を語らしめているのは、そこに、どのような感情が働いているからであるのかを探り、でき得ることならば、イアーゴウの動機を知るてがかりを得ようとする試みである。

1. イアーゴウの嫉妬心

果して、イアーゴウの言葉や行動には、第三者に対して説得力を持ち得るような具体的な動機や理由はないであろうか。第一幕の冒頭、イアーゴウは、オセローが副官として自分を推さず、経験の浅いキャシオを取り立てたとして、オセローに対する憎しみを口にする。更に彼は、第二幕第一場の独白では、オセローとキャシオの二人は共に（機会は各々別の時に相違ないが）、妻エミリアの肉体を弄んだのではないかと疑っていることを観客に告げる。この二つの場面は、この後イアーゴウが陥れることになる、オセローとキャシオの二人に対する感情を窺い知ることのできる場面であるが、そこでのイアーゴウの言葉は果して彼の真意を伝えている

かどうか曖昧であるとして、その言葉の真実性を批評家ばかりでなく、読者、観客も疑ってきた。確かに、劇中では、エミリアと二人の男達の不義を裏付けるべき客観的な根拠は示されていない。又、第三幕三場において、オセローを欺くために際限なく続けられる偽りの言葉を耳にする時、イアーゴウの語る言葉のすべてを疑う傾向が生じたとしてもやむを得ないかもしれぬ。その上彼が、偽りでしかない己を指して“honest Iago”と繰り返し自称するに至っては、一層、その言葉の真実性を疑わざるを得ないのである。

しかしながら、イアーゴウの言葉の多くが虚偽であることを否定できないにしても、そうであるからといって、イアーゴウ自身の語る、オセローやキャシオに対する憎しみと恨みの感情や復讐の意図を疑い、その理由も単なる「口実」であって、本当の意図は別のところにある、いや、確たる意図や動機などありはしないのだ、などと考えることが正しい判断であるかは疑問である。イアーゴウには、「動機なき悪」としか言い表しようのない悪を見る思いがする、或いは、イアーゴウは、寓意としての vice の担い手に他ならない——「オセロー」は道徳劇として見るべき作品である。そう断じた時、この劇の投げかける疑問に答えは与えられるのであろうか。或るいは又、Jack D'Amico のように、イアーゴウを、ヴェニス社会に見られる民族的対立の中で、異質な Moor、オセローを破滅させ、放逐しようとするヴェニス市民の代弁者、実行者として見るべきであろうか。そのような試みが果して、イアーゴウの言動の投げかけ続ける問題の解決になるのか。更には、オセローの人物像を知る手がかりとなるのか、それは大いに疑問であると言わねばならない。

我々は、イアーゴウが語る言葉を客観的立場から見る時、即ち、イアーゴウの偽りと、イアーゴウの偽りを真実と信じる、オセロー以下の主要人物達が彼に与える信頼と、その両方を知る観客の立場に立ってイアーゴウの言葉を考える時、何が、どのような感情が——意図ではなくて、一体どのような感情がその言葉の根底にあって、その時のイアーゴウをして、その言葉を語らしめているのか、その点を想像し、知ろうとしなくてはなるまい。

復讐と称して、イアーゴウが食指を伸ばすことになった人物達、オセロー、キャシオ、そしてデズデモナ。この三人に対して、悪（破滅）をもたらそうとする動機をイアーゴウに与える上で、何らかの大いなる力のあったと思われる特有の感情が、イアーゴウの中に育ってはいなかったであろうか。それは、「悪のための悪」とか、寓意としての悪、そしてヴェニス市民の代弁者としての悪意などではなく、個たるイアーゴウが、特定の他の個たる人物に対して抱く特有の感情である。その或る特有の感情とは、抑制することが不可能であるほどに御しがたく増幅する時、その感情を鎮め満足させるためには、何らかの行動によって表さないでは治まらぬほどの、激しい感情である。そしてその激しい感情とは、イアーゴウの「嫉妬」という感情である。Irving Ribner はイアーゴウの嫉妬に言及してはいるが、その分析は深く試みてはいない¹⁵⁾。無論、劇中において、オセローをして嫉妬の捕われ人、狂気の如き嫉妬の人に化せしめるのは、イアーゴウその人であり、際限のない嫉妬という感情の地獄を見るのはイアーゴウではない。嫉妬の業火に身を焦がし、やがて自ら破滅していくのはオセローである。確かに、表面的にはそうである。しかし実は、「嫉妬」という人間の意志の力の及ばぬ、激しく荒れ狂う感情を身の内に抱えていたのはイアーゴウであった可能性がある。しかもイアーゴウは、他者の嫉妬や悪への誘惑を試みるを待たずして、既に己自身の中に、その「嫉妬」なる“green-eyed monster”を宿していたのではないかと思われるのである¹⁶⁾。

ではイアーゴウは、オセローとキャシオの二人に対して、具体的にはどのような嫉妬を抱いていたのであろうか。これからその点について、劇の進展に沿って検証していくことにしよう。だがその前に、まず、イアーゴウがどのような人物であるのかを見ておかななくてはならない。

2. イアーゴウの美德

第一幕一場の冒頭、副官への昇進の期待を裏切られたイアーゴウは、副官にはよそ者 (Venetian ならぬ Florentine) であるマイケル・キャシオを抜擢した長官、オセローへの憎しみを口にする。その聞き手は、理由は異なるものの、やはり、オセローに対して敵意を抱くロデリーゴである¹⁷⁾。ロデリーゴを相手にイアーゴウは、更に、自分は本来、人に仕える者が持つべき「忠誠心」など持ち合わせず、己自身の利益のためにのみ生きることを旨とする人間であると語る。

Iago. I follow him [Othello] to serve my turn upon him.
We cannot all be masters, nor all masters
Cannot be truly followed. You shall mark
Many a duteous and knee-crooking knave,
That doting on his own obsequious bondage,
Wears out his time much like his master's ass,
For nought but provender, and when he's old, cashiered.
Whip me such honest knaves. Others there are
Who, trimmed in forms and visages of duty,
Keep yet their hearts attending on themselves,
And throwing but shows of service on their lords,
Do well thrive by them; and when they lined their coats,
Do themselves homage. These fellows have some soul,
And such a one do I profess myself.

(I, 1, 41-55, [] は筆者)

イアーゴウ曰く、「世の中には、地位や権力に恵まれ、“masters”と呼ばれる者もあれば、その masters に仕えて一生を終える者もある。しかし、この“masters”と呼ばれる者もすべてが、忠誠なる家臣や部下に恵まれるとは限らぬ。」なにしろ奉仕する者には、真の忠誠者と偽りの忠誠者がいるというわけである。そして、イアーゴウ自身は、真の忠誠者などむしろ軽蔑していることが、引用文中の“Whip me such honest knave”という言葉に端的に表れている。イアーゴウは、上辺は忠誠面をして主人に仕え、その実、己自身のためにのみ忠誠を尽くす者こそ骨のある偉い奴であり、俺はその生き方を実践しているのだと言い放つ。引用文中の、“forms and visages of duty”そして“shows of service”という表現は、そのような偽りの仮面としての「忠誠心」を表す言葉である。イアーゴウは、この仮面をもってオセローに仕え、己自身の目的を（上記引用文の中では“my peculiar end”とあるが、具体的には述べられていない。）果たそうというのである。

さてそれでは、イアーゴウは“shows of service”でありながら、他者の目には、“true loyalty”であり、“true duty”と映るために、具体的にはどのような仮面を己が身に着けるのかといえば、それは、“honest” visage という仮面である。皮肉にも、つい、いましがた、“Whip me

such honest knaves”と言って最も軽蔑したばかりであるはずの、honesty という美德を自分にあてがおうというわけである。だが、この（軽蔑すべきはずの）honesty なる偽りの美德は、オセローを始めとして主要な劇中人物をことごとく欺き、彼等によって真実の美德として信じられ、イアーゴウの隠し持つ悪意（復讐という悪しき企み）に気づく者は一人としていないのである。劇の終盤において、一瞬、イアーゴウの二枚舌の放つ偽りの臭いを嗅ぎつけたかに見えるロデリーゴも、終局、その二枚舌の更なる餌食に終わってしまう。デズデモナーナへの横恋慕は、彼を盲目にし、イアーゴウの真実の姿を暴露するには至らないのである。

従って、イアーゴウの演じ続ける honesty なる美德は、オセローへの復讐、キャシオへの復讐を果たす上では、実に有効に働くことになる。オセローは、自ら真実を確かめることなく、妻デズデモナーナとキャシオの不義を真実と信じ、終に、デズデモナーナを殺害するに至る。キャシオは、それが罠であるとも知らず、泥酔して殺傷事件を起こして副官の地位を失ってしまう。そして“honest Iago”の助言を友情の言葉と信じてデズデモナーナの助力にすがり、復讐を企てるのである。その報いは、不義の汚名と死の宣告である。劇の終盤、彼は、幸運にも死を免れて、自ら失脚し破滅して果てたオセローの後を襲って長官に就任しはするが、危うく魔の手にかかる場所であった。そして、デズデモナーナは復讐の直接の対象ではないものの、イアーゴウの仮面の餌食となる運命を免れることはできない。彼女は、唐突なる怒りと不興を顕わにする夫を前にして、為すすべもなく、イアーゴウの“honesty”を信じるが故に彼に助けを求める。そしてデズデモナーナは、オセローの怒りの源がイアーゴウによってもたらされた不義の疑いにあるうとは、露とも知らず、信頼に対して死を報われるのである。

このようにして、見事に他者の目を欺くことが可能となるのは、イアーゴウが日頃より“honest Iago”として信頼を勝ち得ているからに他ならない。彼の演じる honesty なる美德は、他を欺き、陥れることにおいて、最も有効な復讐の武器となっていると言ってよい。

しかしながら、イアーゴウが honesty なる美德を自らの身に仮面としてあてがった、本来の目的は自己の栄達にあったはずである。具体的には、軍人としての昇進である。即ち、副官への昇進といった実利である。ところが現実には、この、栄達のために有効と信じて用いたはずの honesty なる美德は、果して、そのような実質的利益をイアーゴウにもたらしたのかと言えば、否である。美德は、“honest Iago”という名前、即ち、name としての名誉はもたらしたかもしれない。しかしそれは、イアーゴウの真の狙いではなかったはずである。言うならば、イアーゴウは自らが信じた honesty なる美德という手段によって裏切られた結果（昇進の栄誉はキャシオに与えられる）となっているのである。そうであるならば、この時、イアーゴウの中に一体どのような感情が生じていったであろうか——。この、実質的な報いをもたらすことのないイアーゴウの美德、honesty とオセローやキャシオの美德とを比較する時、或る興味深い問題が浮上してくるのである。

イアーゴウが復讐せんとして思い巡らす相手である、オセローとキャシオには（更には、イアーゴウの憎しみの直接的対象ではないにも関わらず、憎しみの犠牲となるデズデモナーナにも）各々、真実の美德や利点が備わっている。彼らは、その美德や利点によって更に新たな幸運をも引き寄せているのである。その点において、彼等二人（三人）はイアーゴウとは非常に対照的である。オセローは、軍人としての勇敢さ（valour）と人格としての高潔さ（nobleness）によって、異邦人ながらヴェニスの人々から信頼され、畏敬されており、今や、ヴェニスの軍隊の総指揮官の地位にある。それにもまして幸運なことに、オセローの美德は、比類なき美を備える白人の乙女、元老院議員ブラバンショウの娘デズデモナーナの愛を勝ち得ている。一方、

キャシオは、やはり異邦人ながら、軍人としての有能な資質によって（第一幕一場の冒頭、イアーゴウは、彼を無能な輩と呼んで中傷するが、我々、観客・読者には、高潔なる長官オセローの選任を疑う余地は、この時、皆無のはずである。）副官への昇進を果たし、その外観の美は、女性達の愛と羨望の的となるほどの美である。デズデモナーの美德と利点については後述することにする。

イアーゴウには、この二人に備わる真の美德や利点と無縁であるばかりか、彼等がその美德と利点によって、新たな幸を手にしたのとは全く対照的に、己の意に反して身に纏った偽りの美德からは、何ら報われてはいないのである。こうした状況にあるイアーゴウの内面に、自己とは対照的な幸運の只中にあるオセローとキャシオの二人に対して、羨望、更には、嫉妬といった感情が芽生え、やがてそれは憎しみとなって、彼等のその幸運を汚し、根こそぎ奪い取ってしまいたい、という衝動にかられたとしても不思議ではあるまい。しかし、単に、憎むべき相手の至福を奪うだけでは本当の悦び（復讐の成就）は得られはしない。彼等の誇るべき美德と利点も共に損なう方法によって奪うのである。

3. オセローへの嫉妬

3-a. 異質なものの、Moor への嫌悪

第一幕一場の冒頭において、オセローへの憎しみを表明したイアーゴウは、その報復手段の手始めとして、デズデモナーの父ブラバンショウの館へと押しかけていく。秘密の内に執り行われたオセローとデズデモナー二人の結婚について密告しようというのである。

Brabantio. What is the reason of this terrible summons?
What is the matter there?
Roderigo. Senior, is all your family within?
Iago. Are your doors locked?
Brabantio. Why, wherefore ask you this?
Iago. Zounds, sir, you're robbed; for shame, put on your gown;
Your heart is burst; you have lost half your soul;
Even now, now, very now, an old black ram
Is tupping your white ewe. Arise, arise;
Aware the snorting citizens with the bell,
Or else devil will make a grandsire of you.
Arise, I say!

(I, 1, 83-93)

引用文中の“your white ewe”とは、ブラバンショウの美しいひとり娘デズデモナーを指し、“white”とは、その透き通るような、すべらかな白い肌を表すための形容詞である。これと対照的に用いられているのが、“an old black ram”という表現であり、それは言うまでもなくオセローを指している。そして“old”とは、若き乙女デズデモナーとは不釣り合なまでに年齢差のあることを暗に示し、“black”という形容詞によって、ムーア人であるオセローの肌の黒さを強調し、同時に、デズデモナーの白く美しい肌との美醜の対照をも印象づけようというのである。

「今、あなたが惰眠を貪っておる間に、かけがえのない、いとしい愛娘は、醜い黒い手にか

ences, her delicate tenderness will find itself abused, begin to heave the gorge, disrelish and abhor the Moor. Very nature will instruct her in it, and compel her to some second choice.

(II, 1, 215-223)

まず、我々の注意を引くのは、全文が散文で語られていることである。そして、その文体が暗示するように、内容は卑猥な言及や表現で埋め尽くされている。既に触れたことであるが、イアーゴウにとって、love という言葉に精神性の入り込む余地はなく、すべて、人間の情欲 lust でしかないことが、この引用文には歴然としている。しかも、その、本能によってのみ生きる生物の獣性を思わせる肉欲は、ここでは、誰もが貞節なる女性と認めるデズデモナーの本質として強調されている点が興味深い。それは、デズデモナーを神聖化し、その内面の汚れなさを讀める Alvin B. Kernan, Irvin Ribner 等、多くの批評家達のデズデモナー観を欺くものであろう。又、エリザベス朝時代の英国の人々、更には、ヨーロッパの人々に共通する人間観——当時の人々は、外観の美醜はそのまま内面の美醜を映すものと考えた——に対しても、冷笑をもって迎える如きイアーゴウのデズデモナー像であると言うことができよう。しかし、こうした、lust という言葉によって象徴されるが如く描かれた、イアーゴウのデズデモナー像は、個としてのデズデモナーという女性の真実の姿を映すというよりは、語り手であるイアーゴウの「愛」に対する考え方を伝えているものと解すべきであろう¹⁸⁾。

さて、引用文中の、オセローの外見に関する表現に注目することにしよう。引用文三行目、“devil” とは、devil にも等しい黒く醜い肌の色と醜い容貌（ヴェニスの白人の目に、ムーア人特有の肌の色と容貌は醜さと映ったのである）をしたオセローへの言及である。イアーゴウは、デズデモナーがオセローの冒険談に恋したものの、その恋心は早晩、当初の情熱を忘れてしまう日が必ずやってくる。一旦、忘却の時が訪れたなら、あのオセローの顔——ugly blackness, abhorred skin——を日毎眺めて何の歎びが、何の満足が得られるというのか、と問う。先述したように、イアーゴウにとって「愛」に精神性など存在せず、love とは、すべからず lust でしかないのである。そして、その lust を促すのは外観の美である。そうした考え方は、デズデモナーの冷めた情熱 (lust) を再び満足させる力を持つものとして列挙している条件——“loveliness in favour, sumptuousness in years, manners and beauties.”——を見れば明白に表れている。Moor であるが故に醜いオセローには、デズデモナーの愛を永遠とすべき力はない。何故なら彼は、イアーゴウの挙げる必要条件を満たすべき「美」を何ひとつ備えていないからである。

こうして、“devil” という一語は、上記の引用文に表されたイアーゴウによるデズデモナー像と関連づけて見る時、イアーゴウ自身のオセローの外観に対する強い嫌悪感を映す言葉であることが解ってくる。又、それは、第一幕三場で見たブラバンショウの嫌悪感と一致していると言ってよい。従って、あの時、第一幕一場においてイアーゴウは、単に、昇進を阻んだオセローへの報復のための有効な手段として、その黒い肌と容貌について中傷したのではなく、イアーゴウ自身の嫌悪も込めて語っていたのである。

3-b. 疎外さるべき異邦人, Moor

第一幕三場、トルコ軍によるサイプレス島侵攻の報に驚き、ヴェニスの元老院を召集した公爵を前に、ブラバンショウは娘、デズデモナーとオセローとの結婚の異常さと無効を訴えるが、その直前、第一幕二場の終りに於いて彼の語った言葉は、非常に興味深い。その言葉には、異

邦人であり、非白人である Moor に対する嫌悪感は、果して、ブラバンショウやイアーゴウといった、個人に特有の感情であるのか疑問に思わせる節がある。即ち、ムーア人への嫌悪感は、表面的にはどうであれ、現実にはヴェニス社会全体が広く共有する感情ではなかったかと思わせる節があるのである。

Brabantio.

How? The duke in council?

In this time of night? Bring him away;

Mine's not an idle cause. The duke himself,

Or any of my brothers of the state,

Cannot but feel this wrong as 'twere their own;

For if such actions may have passage free,

Bondslaves, and pagans shall our statesmen be.

(I, 2, 93-99)

「この無法なる結婚は、国事に比べるなら顧みるに値せぬ些細なる事と、捨て置くべき問題などでは決してない。いや、それどころか、公爵御自身と元老院の他の面々も、一様に、我が身にふりかかる一大事と感ぜずにはおれぬはず。それほどの重大なる事件と称すべきものである。」この言葉から、当時、純粋なヴェニス人とムーア人との結婚が仮にあるとして、社会から一体どのように受け取られるかを想像することができる。

確かに、劇中では、公爵がオセローに対して好意的な裁定を下し、(オセローは、witchcraft など用いず、その真の愛と、己の人格をもってデズデモーナの愛を勝ち得たという裁定) その裁定によって承認された二人の結婚に対して、第三者からの介入や異論は全く表明されてはいない。しかし、ブラバンショウは娘を奪われた父の怒りに任せて、国事に劣らぬ重大事であると訴えたに過ぎぬのかと言えば、決してそうではあるまい。何故なら、引用文の末尾に見るブラバンショウの言葉は、このあり得べからざる結婚を許せば、どれほどの国家的危機を招くことになるか予期し、危惧しているからである。万が一、ヴェニスの乙女が異邦人 Moor に略奪されることを看過するならば、即ち、ヴェニスの法を犯し、秩序を乱す者として何の咎もなく放免するならば、早晚、ヴェニスは混沌に襲われるであろう¹⁹⁾。ヴェニスの政事を動かすのは奴隷や異邦人となり、法国家、ヴェニスは瓦解するのである。ブラバンショウの言葉は、今や、ヴェニス人は祖国を自らの手で異邦人の手に、しかも野蛮なる未開の民の手に、売り渡さんとするのかと警告しているのである。

結果的には、ブラバンショウの訴えは受け入れられず、彼は、娘を失うことになりはする。だが、ヴェニス社会の中で現実に優勢であったのは、この、ブラバンショウの言葉が語る態度——異質なもののへの拒絶と嫌悪——民族が異なり、肌が異なり、文化も宗教も異なる者は、それ故に拒み、忌嫌うべきものといった嫌悪感——に象徴される態度ではなかったであろうか。即ち、仮に、軍人として優れているが故に、軍人としての高い地位や権限を与えられることはあっても、異邦人、とりわけムーア人に関しては、ヴェニスの政務に就くことは許されない。又、結婚に関しては、ヴェニスの白人とムーア人の間の結婚は禁ずるべきである。それはおそらく、異質なものを拒むためであるだけでなく、蛮族との混血が己の民族の血を汚すと考ええるからでもあるに相違ない²⁰⁾。

さて、こうした異邦人であるムーア人に対する拒絶と嫌悪の態度は、イアーゴウがオセローを“devil”と呼ぶばかりか、“an extravagant and wheeling strangers of here and everywhere”といった、氏素性の知れぬ「よそ者、流れ者、放浪者」を示す言葉によって中傷していることに

も窺い知ることができる。そして仮に、ブラバンショウやイアーゴウのムーア人観が、ヴェニス社会の支配者階級の中で優勢なるものであるとすれば、ヴェニス全軍の総指揮を担う長官の地位にあるオセローは、政治に直接関わる権限は持たぬものの、異例の立身出世を果たしたことになる。

一方、ヴェニス生まれのヴェニス育ちであり、軍人としての資質と経歴に相応の自負を抱くイアーゴウ自身の場合はどうであろうか。偽りとはいえ、“honesty”なる美德によって人々の信頼を勝ち得ているイアーゴウであるが、果して、満足に足り得る栄達を手に行っているのか？既に論じた通り、答えは否である。己の意志に反して“honesty”という美德を演じ、忠誠心よろしくオセローに仕えながら、昇進の機会は逸してしまったイアーゴウである。ところが、本来ならば、ヴェニス社会から排斥されるべき異邦人、ムーア人オセローは栄達の頂点にあり、しかも、イアーゴウの栄達を阻む張本人でもある。いや、栄達だけではない。オセローは、通常ならば手にすることのできぬはずの、若く美しいヴェニスの白人の娘を妻に得たのである。この果報者の幸運を目のあたりにして、そこに嫉妬と憎しみの感情が芽生えたとしても何の不思議にもあたらないはずであろう。

オセローは、己自身の培った美德である「高潔」(nobleness)と、武人としての手柄によって、栄達と愛を我ものとした。他方、イアーゴウは、オセローに備わるような真の美德に恵まれぬ故にこそ、そして又、偽りの美德をもってしても報われぬが故にこそ、一層、オセローに対する憎しみと嫉妬の感情を深め、増していくのである。しかも、オセローの如く、表裏なく誠実さをもって事にあたり、己が誠実であるが故に人を疑うことを知らぬ、そういう輩を最も蔑む反面、そうした美德のもたらす幸と利点に対しては、羨望の念を禁じ得ないのである。イアーゴウは、真の美德には顧みず、その幸と利のみは己が手にもたぐり寄せたいと願うのである。しかし、現実には、美德にも、美德のもたらす幸運にも、彼の手は届かぬ。届かぬものであるならば、そのいずれをも手にして、今まさに至福の時にあるオセローの名誉と愛を汚し、破滅に至らしめるより他に、イアーゴウ自身の痛みを癒す術はあるまい。

4. キャシオへの嫉妬

4-a. フローレンスからの異邦人の栄達

劇中、イアーゴウはキャシオに言及する際、二度ばかり“Florentine”と呼び、殊更に、彼がヴェニスの出身ではなく、オセローと同様に異邦人であることを強調し、敵対心をほのめかす態度をみせる。イアーゴウは、キャシオのことを“Florentine”と呼ぶ時は、いずれも彼に対する妬み、恨みといった感情のこもった言い方をしているのである。一度は、劇の冒頭、イアーゴウを出し抜いて副官への昇進を果たした男が、こともあろうに、金勘定には優れているものの、戦さのことは全く無知、無能のフローレンス人であると、ロデリーゴを相手に不満をもらす場面においてである。

Iago. For ‘Certes’, says he [Othello]
 ‘I have already chosen my officer’
 And what was he?
 Forsooth, a great arithmetician,
 One Michael Cassio, a Florentine,
 A fellow almost damned in a fair wife,

That never set a squadron in the field,
Nor the division of a battle knows
More that a spinster, unless the bookish theoretic,
Wherein the togged consuls can propose
As masterly as he. Mere prattle without practice
Is all his soldiership.

(I, 1, 16-27. []は筆者)

「オセローが選んだ副官の名を聞いてみれば、マイケル・キャッシュとかいうフローレンス人。あの男は、金のことに關してはなかなか詳しいが、戦のこととなると何一つ知識もなければ、経験もない役立たずな野郎さ。どうやら、女には不自由しないらしいが、いまに、その女遊びがもとで、顔はまともでも、とんでもない性悪女につかまって四苦八苦する亭主になり下がるに決まってるんだ。」

引用文中の“a great arithmetician”とか、“the bookish theoretic, mere prattle”といった表現は、キャッシュを始めとするフローレンス人に対する棘のある風刺である。金勘定は巧みで商売上手であるものの、こと戦さでは、からきし意気地も腕もない無能ぶり。いざという時にも、何の役にも立たぬ理屈を並べ立てるだけ。それがフローレンス人だというわけである²¹⁾。ここに見られるキャッシュ評価は、武将としての資質の欠落を指摘することが、イアーゴウの主たる狙いとなっではいるが（但し、それが事実であるか否かは別である）、引用文の第四行、“A fellow damned in a fair wife”という言葉には、女の美と深情けに縁の深いキャッシュに対する羨望と侮蔑の混在した感情が見え隠れしており、興味深い。

さて、イアーゴウがキャッシュのことをその名前を用いず、“Florentine”と、敢えて出身地を示す言葉によって呼ぶその態度には、異質なものに対して抱く拒絶と嫌悪の感情が表れているものと考えてよいであろう。それは、ムーア人であるオセローに対する嫌悪感ほど激しいものではないとしても、相通ずるものと言ってよい。キャッシュもまた、Venetian ならぬ Florentine でありながら、イアーゴウを凌ぐ栄達を果しているのである。しかも、彼は、忌み嫌うべきオセローによって拔擢され、イアーゴウから、副官の地位に昇る機会を奪った男であった。そしてそこに、イアーゴウがキャッシュに対して、憎しみのこもった妬みの感情を抱いていく根拠を見ることができるのである。

しかしながら、イアーゴウがキャッシュに対する違和感を強め、更にその違和感を、オセローに対して抱くに至った憎しみと嫉妬の入り混じった感情へと変質させていくのは、キャッシュが異邦人であることばかりではなく、もっと別の理由が関わっていた。それは、キャッシュの外観の美である。

4-b. 妬ましき異邦人の美

キャッシュは、オセローやイアーゴウとは違って、武人でありながら美しい容貌と洗練された会話や物腰を身につけた青年である。それは、自ずと女性達の関心と羨望の的となり、彼女等から愛を注がれずにはおかなかった。キャッシュの美は、女の美と（必ずしも美しい女にのみ、愛されたというわけではなかったが）愛という、新たな利点をもたらしたのである。それに反して、イアーゴウには、唯一の美德、しかも、偽りの美德でしかない“honesty”より他に持ち合わせる利点はなかった。イアーゴウの目にはキャッシュは、己自身とは無縁のもの——副官へ

の昇進と外観の美、そして女の愛、それらすべてを与えられている幸運なる男、と映ったに違いない。キャッシュオは、イアーゴウの知らぬ悦びを意のままに手にすることができるのである。しかも、キャッシュオはヴェニス人ならぬフローレンス人、異邦人である。妬ましくないはずはあるまい。

第二幕一場、288行、“I fear Cassio with my night-cap too”と、キャッシュオと妻エミリアとの間に不義ありと疑っているらしきイアーゴウの言葉は、間違いなく根拠のない中傷であろう。しかし、ふと、そのような想像をし、疑ってみたくなるような、そのような美と、或る種の魅力がこのキャッシュオという男には備わっているのである。

いずれにせよ、キャッシュオは立身出世という栄達も、女の美と愛も、手を延ばせば届く位置に身を処している。キャッシュオもまた、異質なものでありながら本国人のヴェニス人を凌ぐ美德と利点を備え、更にその美貌という美德によって、新たな利点も引き寄せるという幸運に恵まれ、ヴェニス社会での勢いを増すばかりである。このようなキャッシュオをイアーゴウは、ムーア人でありながら成功の頂点に達したかに見えるオセローと同様、激しく嫉妬し、憎まないではおれなかったに違いない。

4-c. キャッシュオの外観の美

イアーゴウがキャッシュオの美に言及し、描写している場面を幾つかを取り上げてみることにしよう。

初めに取り上げるのは、第一幕三場のイアーゴウの独白である。独白の中でイアーゴウは、オセローの耳に、キャッシュオがデズデモーナに対して親しい態度を見せ過ぎると、中傷してやろうと企んでいる。

Iago. After some time, to abuse Othello's ear
That he [Cassio] is too familiar with his wife;
He hath a person and a smooth dispose
To be suspected, framed to make women false.

(I, 3, 377-380, []は筆者)

引用文の後半には、イアーゴウがキャッシュオをどのように見ていたかが端的に表されている。「美しい容貌と物腰の柔らかさで、女を迷わせ、(時の運次第では)間違いを冒さしてしまうような危うさが、確かにこの男にはある。」この言葉には、イアーゴウのキャッシュオに対する、とりわけその外観の美に対する嫉妬を感じさせるところがある。仮に、この言葉がキャッシュオへの中傷を目的とするものであったとしても、直接イアーゴウの言葉を聞く者の耳には、いくばくかの真実性を訴えるような、そのような美と或る種の魅力をキャッシュオは備えていたのではない。そうであったからこそ、オセローがイアーゴウの注進を(実は中傷にほかならぬ)耳にして驚愕しつつも、次第に、妻デズデモーナの愛と貞節を信じるよりは、不義による裏切りを信じていく誘惑に捕らわれていくのであろう。第三者の目には不可解と映るほど、実に脆く、オセローは、自分自身とは無縁の「若さと美」を与えられたキャッシュオという男の誘惑に、身を委ねたデズデモーナの不貞を信じるに至る。その決定的な要因は、刺繍入りのハンカチの行方や、イアーゴウの目撃証言(キャッシュオの夢の中の告白、キャッシュオのイアーゴウ抱擁等)にあるよりも、この、女を迷わせずにはおかぬキャッシュオの美にあったのではない。イアーゴウの言葉の力や、オセローの自信喪失(デズデモーナとの間に立ちはだかる外観、年齢、人種の隔たり)を強め、デズデモーナの裏切りを救いのないほどに疑う余地のないものとする意味において、

キャッシュオの美を無視することはできない。

次に挙げるのは、女にその貞節を捨てさせかねないキャッシュオの美と魅力について、より具体的な描写をするイーゴウの言葉である。第二幕一場の終わり、ロデリーゴを相手に、デズデモーナの本質はその lust にあり、やがて、オセローには満足し得ず不義を働くは、火を見るよりも明らかであると語るイーゴウである。その不義の相手は、lustを満たすための資質をすべて備えたキャッシュオである。

Iago. Besides the knave is handsome, young, and hath
all those requirements in him that folly and green minds look after.
A pestilent complete knave; and the woman had found him
already.

(II, 1, 232-235)

引用文の第一行目“the knave”とはキャッシュオのことを指している。何故に knave かと言えば、キャッシュオの礼儀正しい言葉使いや優美な物腰は、己の本性を覆い隠す衣に過ぎぬからである。その衣、“the mere form of civil and humane seeming” (II, 1, 227) の内側には、人間ならぬ獣性に等しい肉欲 (lust) の求めるまま食指を延ばす“salt and most hidden loose affection” (II, 1, 228) が潜んでいるのである。イーゴウの目には、キャッシュオの外観の美は男の本性を覆い隠し、己をより美しく、より魅力的に見せるための手段であり、隠れ蓑と映る。そして愚かな女は、その美しき隠れ蓑に心奪われ、男と同様の己の中の本性に突き動かされ、キャッシュオの手にかかってしまうのである。オセローの妻デズデモーナもその愚かで無知なる女の一人なのであった。

こうしたイーゴウの描写に、事実としての真実性を与え得る根拠があるかなきかは問題とはならない。少なくとも、イーゴウ自身にとっては問題とはならない。何故ならば、イーゴウによれば、人間の男女の愛に精神的なものなど存在もしなければ、必要でもないからである。確かに存在するのは、情欲としての愛、即ち lust のみである。そして外観の美とは、人間の内なる肉欲を促し、その求めを満たすための媒体に他ならない。デズデモーナとキャッシュオのいずれもが、己の中の本性に従って行動を起こすのである。デズデモーナは、オセローの冒険談に心を動かされ、恋心を知ったものの、やがてその恋心が幻に過ぎぬと気づき、必ずや、己の本性の命ずるまま、もっと別のものを、そして、より美なるものを求めるはずである。

さて最後に挙げるのは、第五幕初めのイーゴウの独白である。劇の終盤、いよいよ疑いを深め、妻デズデモーナと部下キャッシュオとの不義を確信したかのように、激しい嫉妬に苦しむオセローは、キャッシュオを討てとイーゴウに命ずる（発端はイーゴウが自ら申し出る）。一方、イーゴウは、実るはずのないデズデモーナへの横恋慕に更に期待を抱かせて、ロデリーゴから金品をまくしあげていたが、その報いとして、遂に金品の返済か約束の履行かと迫られていた。いよいよ進退窮まったイーゴウは、一計を案じてこの両者に刃をもって闘わせることにする。双方が果ててくれれば、オセローの命令を遂げ、己の身も安泰というわけである。

Iago. Live Roderigo,
He calls me to a restitution large
Of gold and jewels that I bobbed from him

As gifts to Desdemona.
It must not be. If Cassio do remain,
He hath a daily beauty in his life
That makes me ugly; and besides, the Moor
May unfold me to him there stand I in my peril
No, he must die. But soft, I hear him coming.

(V, 1, 14-22)

注目すべきは、引用文の後半部分である。ここは、仮に、キャシオが存命した場合、イアーゴウ自身にはどのような運命が待っているかを想像しているところである。ロデリーゴの振り降ろす切っ先を免れて命を得たキャシオが、やがて送ることになるであろう“daily beauty”とは、まず第一に、オセローの誤解（デズデモナとの不義の疑い）も解け、許しを得て、失っていた副官の地位を回復することを指すであろう。更に、その変わらぬ外観の美によって、以前にも増して女の愛と賞賛を勝ち得ることをも指すと考えてよい。「軍人としての栄達」と「女の美と愛」、*“daily beauty”*とは、こうしたキャシオの美しくも勝利感に満ちた未来を象徴する言葉である。

ところが他方、キャシオが再び昇進を手にし、女の美にあずかればあずかるほどに、イアーゴウの未来には歎びとはほど遠い、暗澹としたものしか見えてはこないのである。何故なら、存命したキャシオからやがて真実が暴露され、イアーゴウの裏切りが白日の元に曝される日が訪れれば、栄達や女の美は言うに及ばず、その命さえも失いかねないからである。キャシオの手にする*“daily beauty”*を思う時、それこそは、イアーゴウの残りの命、そして死の瞬間は*“ugly”*なるものとして終わるよりほかに想像のしようはなかったのである。

5. デズデモナの美

5-a. ギリシャ神, Jove の歎び

イアーゴウが劇中、デズデモナのことを語る時、聞き手が誰であれ、そこには一貫して彼女を男性の情欲の対象として見る態度が窺える。そして、これは既に触れたことであるが、イアーゴウが、デズデモナ自身の内面にも、「情欲」という人間の意志の力の及ばぬ獣性が潜んでいると考えていることも明らかである。それは、劇中、キャシオによって讃えられ、批評家達によって讃えられてきた*“divine beauty”*即ち、汚れなき天上の美や貞節の鑑の如き女性像を完全に欺くものである。無論のこと、イアーゴウの言葉が語るデズデモナ像は、彼女とキャシオの不義が事実であるような印象を与えることによって、憎むオセローを欺くための中傷を目的としたものであることを否定することはできない。従って、*purity* であり、*chastity* であるはずのデズデモナの本質が、*lust* 以外の何ものでもないようなイアーゴウの言葉に、顧みるべき価値など皆無であるとして否定し去る（一笑に伏す）批評家も少なくないであろう。しかしながら、イアーゴウが「愛」の精神性を否定したと同じように、デズデモナの美に肉欲への希求のみを見ようとするその言葉と態度を、単に根拠なき中傷と呼んで捨ておいてよいのであろうか。それは、中傷でありながら同時に、イアーゴウ自身の偽らざる印象を語っているのではないのであろうか。更には、イアーゴウのみならず、デズデモナの姿を目のあたりにする男達が共通して感じる印象を語っているのではないか。男達が己の目に映す、デズデモナの *sexuality*（としての姿を）語っているのではないか。仮に、男性達にとってデズデモナ

の美は、終局、イアーゴウの観察通り、男性自身の情欲を満たすための存在であり、肉欲の悦びを求めさせる存在であるという見方が否定できぬものであるとしたらどうであろうか。

イアーゴウの証言がどうであれ、デズデモーナ自身の本来の姿が *chastity* や *modesty*, *purity* といった美德によって象徴されることは、誰も否定することはできない。そして、そのことをデズデモーナが自ら証すかのように、第四幕三場の後半、彼女はエミリアとの一問一答の中で、たとえ夫に裏切られるようなことがあろうとも、自分ならば、同じ裏切りをもって報復することなど想像にも及ばぬ、あくまで「貞節」と、変わらぬ「愛」を貫くこと以外考えられぬと語っている²²⁾。しかしながら、デズデモーナ自身が本来「貞節」の鑑の如き女性であることと、彼女の美を目にする男性達はその姿にどのようなものを見、どのような感情を呼び覚まされるか、それは全く別の問題である。イアーゴウの描写する通り、デズデモーナの姿は男達の目に“*sport for Jove*” (II, 3, 16) と映る可能性を否定することはできないであろう。いや、むしろそうであるからこそ、第三幕三場から第四幕一場にかけてイアーゴウがオセローをして妻の不義を事実として信じさせるべく誘惑を試みる時、直接、婉曲を問わず、性的な表現や卑猥な描写が彼の嫉妬と憎しみを深めていくうえで、最も効果的な力を持つのである。キャシオとの許されぬ交わりを連想させる描写こそが、まさに、オセローを狂わせていくのである。又、オセローがデズデモーナに対して愛を感じ、求愛するに至るその発端は、確かに、武人として名を成すに至るまでの、数々の冒険と苦難に満ちた幾年月を語る自分の話に共感し、哀れを感じて聴き入ってくれるデズデモーナの優しさであった。しかし、妻デズデモーナの不貞を疑い始めて後のオセローをして最も強く、デズデモーナに執着させているのは、その外観の美が促してやまぬ、男の情欲ではないであろうか。

5-b. オセローの愛とデズデモーナの美への執着

第五幕二場の冒頭、“*It's cause*” という言葉と共にオセローは登場する。妻の裏切りに対して「死」をもって報いんとして二人の寝室に現れたオセローは、あたかも、デズデモーナの殺害が神になり代わって「不義」という大罪に裁きを下す、「正義」の担い手の如く振る舞うのである。だがその実、“*It's cause*” という言葉に始まるデズデモーナ殺害の正当化（自己弁明）の直後に続くのは、彼女の美 *sexual beauty* への執着を窺わせる言葉なのである。そして、第三者（観客、読者）に与える印象も、正義の実践者オセローであるよりは、デズデモーナの美の誘惑から逃れることのできぬ、「愛の捕らわれ人」オセローである。デズデモーナの貞節さとその優しい心根を愛したはずの武将、高潔なる人と讃えられるオセローもまた、彼女の美の前に屈する点においては例外ではないのである。

オセローのデズデモーナへの執着 (*sexual attraction*) は、第四幕一場にも明白に表われている。デズデモーナの不義を確信したオセローは、イアーゴウを前に、その日の夜にもデズデモーナを殺害し彼女の裏切りに報いてやると宣する。

Othello. Get me some poison, Iago — this night. I'll not
expostulate with her, lest her body and beauty unprovide
my mind again — this night, Iago.”

Iago. Do it not with poison; strangle her in her bed, even
the bed she hath contaminated.

Othello. Good, good! The justice of it pleases; very good!

Iago. And for Cassio, let me be his unhdertaker. Thou shall

hear more by midnight.

Othello. Excellent good!

(IV, 1, 192-200)

オセローは、デズデモーナを毒をもって今夜にでも殺してしまうのだと言う。更にオセロー、「話など無用なり。」何故なら、美しいデズデモーナの肉体が感覚を惑わせ、憎しみと復讐の決心を鈍らせてしまいかねぬからである。オセローは、妻と言葉を交わすうちにその肉体の美しさ、芳しさ、いとおさが蘇ってくることを恐れているのである。オセローは、デズデモーナへの坑し難い執着が己を未だ捕らえていることを誰よりも知っていた。彼は、デズデモーナを失いたくはない、むしろ愛し慈しみたいと願う、今一人のオセローに屈するかもしれない。それを恐れているのである。だが、「殺す」と言うオセローをイアーゴウは止めはしない。殺すことをむしろ勧めるのである。但し、「毒」はやめて「絞殺」にすべしと進言する——デズデモーナが己が手によって汚した、あのベッドの上で絞め殺してやるのだ、それが一番だ——と。オセローは、イアーゴウの「汚されたベッド」という言葉に己の迷いを、そして執着を押し殺されてしまう。「そうだ、二人の愛を汚し、オセローの誠を欺いたあのベッド。そこで今夜はデズデモーナよ、お前が欺かれなければならぬ。」「愛の床」(真の愛と、裏切りの愛)において遂げられる復讐への誘惑は、オセローをして迷いから決行へと一気にいざなうのである。それは、最も激しく、最も完璧に憎しみを凝縮して表わし、そして、己の歎きと痛みを償ってくれる方法であるかに思われたのである。

オセローは、ここでも“The justice of it pleases”(IV, 1, 197)と「正義」に言及し、デズデモーナが自ら「不義」という行為によって正義を欺いた、まさにその場「不義の床」において「正義」の裁きを受けるのだと、そしてこれこそが最も正義に叶う裁きであると、復讐の正当性を訴えている。確かに、夫を裏切り貞節を捨てる妻は、人の道に外れ正義を欺く罪の人であるかもしれぬ。だが、ここでオセローを動かしているものは「正義」でも無ければ「正義への希求」でもなく、人間としての感情であろう。それは、愛を予期せぬ形で奪われ、裏切られた者の抱く驚きと歎きであり、嫉妬、憎しみ、そして報復の願いである。「愛の床」でのデズデモーナ殺害を“Good, good! The justice of it pleases”と讃えるその言葉は、正義の代弁者の声ではなく、愛した女への執着こそが語らせるオセロー自身の歎きの声である。

しかし、我々は、オセローがイアーゴウの誘惑に誘われるまま、その人格的高潔さとは裏腹に激しい嫉妬を顕わにし、デズデモーナの肉体(としての美)への執着を強めていくからといって、それがムーア人としての本性にのみ直結する獣性であると考えてはなるまい。既に論じてきたように、肉体の美や内なる肉欲に屈することが獣性の現われであるならば、それはムーア人であるか、ヴェニス人であるか、フローレンス人であるかを問わぬ、男性に(そして女性も含めた人間に)共通する本性の一面なのである。少なくとも、この劇中では、イアーゴウの言葉を通して、又、その言葉に対するオセローやキャシオの応じ方を通して、獣性としての愛、lustが普遍的なものとして語られているのである。従って、デズデモーナ殺害直前のオセローや、殺害を決意するに至るまでに見せた、狂気に近い嫉妬に己を見失うオセローを指して、Moorであるが故の本性を暴露した姿である、といった解釈をするのは短慮と言わねばなるまい。批評家の中には、“Moorishness”, “primitive or savage instincts”, “his own sullied flesh”といった表現を用いて、オセローが「高潔」という名的美徳の衣を脱ぎ捨てて、彼本来の姿、即ち、ムーア人の本性である獣性を浮上させたかのように説く人々がある²³⁾。しかし、我々

は忘れてはなるまい。シェイクスピアが劇の前半部で描いて見せたオセローの高潔さが、本性を覆い隠す衣などではなく真実の美德であるが故にこそ、後に襲いかかる変化、その想像を絶する変様と自己喪失が劇的变化としての悲劇を生むことを。そしてそうであるからこそ、時や時空の隔たりを越えて四半世紀におよんで今なお、人々の共感を促してやまぬのであるということも思い出さなくてはならない。

5-c. キャシオの敬愛とデズデモーナの美

デズデモーナを「美の女神」をも凌がんばかりの美として、観念的に讃えるキャシオも、実は、デズデモーナの美が放つ（但し、デズデモーナ自身は意図せずして放つのである）情欲への誘惑の香りを感じないではおれないのである。それは、第二幕三場の冒頭、サイプラス島に到着したばかりのオセローの新妻、デズデモーナをめぐって噂をするイアーゴウとキャシオの短い対話の中に読み取ることができる。

Cassio. Welcome, Iago; we must to the watch.

Iago. Not this hour, lieutenant; 'tis not yet ten o'clock.
Our general cast us thus early for the love of his
Desdemona; who let us not therefore blame: he hath not
yet made wanton the night with her, and she is sport
for Jove.

Cassio. She's a most exquisite lady.

Iago. And I'll warrant her full of game.

Cassio. Indeed she is a most fresh and delicate creature.

Iago. What an eye she has! Methinks it sounds a parley to
provocation.

Cassio. An inviting eye, and yet methinks right modest.

Iago. And when she speaks, is it not an alarum to love?

Cassio. She is indeed perfection.

Iago. Well, happiness to their sheets!

(II, 3, 12-25)

これは、サイプラス島を襲おうとして嵐に見舞われ敗退したものの、トルコ軍に対する警護は未だ怠ってはならぬと、オセローがその任務をキャシオとイアーゴウの二人に託して、自分はデズデモーナを伴って自室に退いた直後に交わされた会話である。注目すべきは、散文による対話になっている点である。この文体から予測できるように、その内容には性的な言及が多くみられる。とりわけ、イアーゴウの言葉にはきわだって多くなっている。

引用文中、イアーゴウの用いる“love”は無論“lust”の意味である。更に、“she is sport for Jove”という表現によって、オセローを古代ギリシャの絶対神ゼウスに喩えているが、これから、デズデモーナを従えて新床の睦み事に向かわんとするオセローは、ギリシャ神話の世界において神々の頂点に立ち、己の望むまま、己の中の情欲の求めを満たすJoveにほかならないというわけである。そして、デズデモーナは確かに、Joveなるオセローの肉体の悦びの源となる女だと評しているのである。或るいは、この比喩としての“Jove”という呼び名は男性すべてを指す言葉であるかもしれぬ。そうであるなら、デズデモーナは彼等にとって、肉欲の求めを満たすための最高の女であると暗に語っていることになる。

さて、こうしたイアーゴウのデズデモーナ評に応じるキャシオの言葉は微妙で曖昧さに満ちている。そして読み方によっては、イアーゴウの意見に同意した答えとして理解することも可能になってくる響きを帯びてくるのである。まず、引用文8行目の“exquisite”という語を単に“most beautiful”と解するなら、必ずしも問題とはならない。しかし、キャシオがイアーゴウの“sport for Jove”という言葉に対して、直接的に応ずることを憚って曖昧に答えたのであれば、暗に同意をこめて exquisite という語を用いたことになる。即ち、“exquisite” as “sport for Jove” というわけである。

次に我々に注意を引くのは、引用文12行目－15行目の対話である。デズデモーナの目を指して「いかにも、男の心をそそるような目ではないか。」と言うイアーゴウの言葉に、キャシオは“An inviting eye”と応じる。彼は思わず、「確かにあの目で見返されると、男は何としたことか、誘惑を覚えずにはおれない。」と答えてしまったのである。だがその直後、われ知らずもらした己の言葉に驚いたのか、その正直な感情を押し込めるかのように、デズデモーナの目の放つ光は「貞節の光」であることに変わりはないと、急ぎ付け加えるのである。

だが、それにかまわずイアーゴウは続ける。「デズデモーナがひとたび口を開くや、そのひと言ひと言が間違いなく「愛を告げる言葉」“alarum to love”となって男の耳に響かずにはいない。」但し、ここでは「愛」と言っても情欲の他に指すものはない。このイアーゴウの言葉に対してキャシオの返す言葉は、“She is indeed perfection”である。それを文字通り、「稀にみる、美しく貞節なお方。」と解するのであれば何ら問題はない。しかし、この時イアーゴウの言わんとするものが何であるかを既に察して、敢えて直接的には同意か拒否かを表明することなく、曖昧な言葉として“perfection”という語を選んだ可能性も否定することはできないのである。仮にそうであるとすれば、“perfection”という一語から、この対話の冒頭で“exquisite”という語によってイアーゴウの性的言及“sport for Jove”に応じた、あの答え方と全く同じものを我々は読み取ることができるのである。表面的には単に、「喻えようない素晴らしいお方、この上なく美しいお方」と答えておきながら、実は暗にイアーゴウに同意しているとすれば、キャシオは“perfection” as source of desire 或るいは、“perfection” of “sport for Jove”という含みを持たせて“perfection”という語を用いたことになる。このように考えてくると、キャシオはイアーゴウほどに明らかに、デズデモーナ的美がその美を目にする者の中に、坑い難く呼び覚ますものが何であるかを口に出しはせぬものの、確かに、イアーゴウの言葉の告げるデズデモーナ像を完全には否定することのできない、或る印象を彼女から受けていることになる。いやむしろ、イアーゴウの言葉そのままの、押さえ難い内なる感情に自ら気付いていたかもしれないのである。

果してそうであるなら、イアーゴウのこうした性的な側面を強調したデズデモーナ描写は、単に、オセローやキャシオに対する恨みと嫉妬に報いるために試みるデズデモーナへの中傷であるとは言いきれなくなってくるであろう。そして、イアーゴウの言葉は、彼自身がデズデモーナの姿から受ける印象を、感ずるままに語っているのではないかと思われるのである。何故なら、イアーゴウの描くデズデモーナ像に応ずるオセローやキャシオの態度や言葉から判断する時、“sport for Jove”としてのデズデモーナ像を、まったくその実像を偽るものとして退けることはできないからである。我々はそこに、男性達が共有するひとつの印象を見る思いがするからである。確かに、イアーゴウの言葉が告げ、オセローやキャシオが同意をもって応ずるようなデズデモーナ像は、彼女自身が意図するものでもなく、又、デズデモーナ本来の美德とは相入れぬ女性像であるに違いない。それはちょうど、「トロイラスとクレシダ」に登場するトロイのクレシダが、人質としてギリシャに送られた時、ギリシャの男達の誰もが、彼女

の姿の中に情欲への誘惑を見たのと同様である。あの時、当のクレシダは祖国トロイの地で、恋人トロイラスと涙ながらに別れを惜しんだ、その記憶に胸塞ぐ思いであったはずである。ところが多くの場合、批評家達も観客、読者も、ギリシャに足を降ろしたクレシダが、早や恋人のことなど忘れ果て、異国の男どもに媚びを売る姿をそこに思い描き、「クレシダはふしだらな多情な女である」と非難の声を挙げて彼女の罪深さを責め、嘆くのである。しかし、果してクレシダ自身が異郷で媚びを売り、祖国トロイへの愛と恋人を捨てようとしたのか、我々は今一度問い正してみなくてはなるまい²⁴⁾。クレシダの姿に「媚び」を見たのは、男達自身の目であり、彼等の内なる情欲であるかもしれぬからである。

さて、先に引用した第二幕三場の冒頭、キャシオと交わした対話の中で、デズデモナーのことを“*She is sport for Jove*”と呼び、その目を指して *her eye “sounds a parley to provocation”* と描写する時のイアーゴウは、クレシダの歩く姿に男の情欲をそそるものを見たギリシャの男達と変わるところのない感情を、己の身の内に感じていたのではないであろうか。そして、ロデリーゴの横恋慕の後押しをし、オセローの嫉妬を促し、キャシオにデズデモナーの怪しげな美を語る際も、いずれの場合も完全に第三者、即ち、扇動者の立場に徹しているわけではなく、イアーゴウ自身がデズデモナーの美に魅せられた男達の（者の）一人として語っているのではないか。ところが、デズデモナーの美を占有したいという欲求にかられながら、イアーゴウにはそれを満たすことのできる望みはない。彼の内に呼び覚まされた希求は遂げられぬまま葬り去るべき運命にあったのである。何故なら、イアーゴウは既に妻を得た身であり、その“*honest iago*”の名を——たとえ偽りの名であっても、この名を唯一の武器として身にまとい、世に処しておる——この名を汚すような行為は致命的となる。イアーゴウにとって、デズデモナーを誘惑し、求愛することは己自身を裏切るに等しい無謀であった。又、仮に独り身の自由があったとしても、デズデモナーに選ばれる男ではなかったのである。

デズデモナーを愛し、そして彼女の愛に報われたのはオセローであった。オセローは、武人としての有能なる資質と「高潔」という美德によって人々から畏敬されているとはいえ、ヴェニスにあっては異邦人であり、しかも“*devil*”としか言いようのない黒い肌と醜い容貌をしたムーア人である。若く美しいデズデモナー、そして貞節でありながら激しく男の情欲をそそるデズデモナー、その美と愛をあゝ Moor、あの嫌悪すべきオセローが当てがわれようとは！ 何一つ外なる美を持ち合わせず、年齢と言え、デズデモナーとは不釣り合なまでに歳月を重ねたこの男、オセローが、類稀な美と愛を報われるのである。それは、イアーゴウにとって、耐えがたく許し難い運命の女神の仕業というべき現実であった。しかしイアーゴウは、デズデモナーの愛したオセローの人格も武人の輝かしい歴史も持ち合わせてはいなかった。第一幕三場、父ブラバンショウが、嫁ぐべき価値なしと蔑み退けたムーア人の男を、デズデモナーは“*I saw Othello's visage in his mind/ And to his honours and his valiant parts/ Did I my soul and fortunes consecrate.*” (I, 3, 248-250) と高らかに讃え、誇りと決意をもって己の選んだ男への永遠の愛を表明する。だが、イアーゴウの中には、デズデモナーの“*soul and fortunes*”に値すべき何ものもないのである。それならば、女の目を奪い、心を惑わせるに足る容貌を備えているかと言え、そのような利点とも無縁である。イアーゴウは、キャシオが与えられているような美しき容貌と女の関心を引く身のこなしが“*framed to make women false*” (I, 3, 380) と噂され、中傷されるような魅力は持ち合わせてはいなかった²⁵⁾。従って、架空のデズデモナー略奪でさえ可能ではなかったのである。イアーゴウの手にするのは、自らが自らに与えた偽りの美德“*honesty*”のみである。しかもそれは報いなき美德であった。

こうしてイアーゴウは、美德という点において、又、その美德故に手にする世俗的栄達において、更には、女性という姿形を取った美の所有（占有）という点において、激しくオセローの幸運を嫉妬し、そしてキャシオの幸運を嫉妬し憎むことになるのである。あの第三幕三場の長い temptation-scene はこのようなイアーゴウの憎しみを伴う「嫉妬」という感情から生まれたものと言うこともできるかもしれない。皮肉にもイアーゴウの嫉妬は、オセローを「嫉妬」という狂気へといざなう「誘惑」の場を生み出すべく、イアーゴウ自身を導いたのである。

結 び

劇「オセロー」において、高潔と武勇の誉れ高い主人公オセローから愛と名誉を奪い、破滅に至らしめるイアーゴウ。そのイアーゴウは自らの口から、オセローへの憎しみとその理由を語る。しかしながら、19世紀の初めから現在に至るまで、批評家の多くは、そして一般の観客や読者も含めて、イアーゴウの語る言葉は彼の真の動機を伝えてはいないと考えてきた。測り知れぬ悪の印象を与えるイアーゴウの言動は（とりわけ、オセローに対する悪意と謀り事）彼をもはや人間ではなく、「悪」の体現 evil (devil) incarnation であると人々に言わせてきたのである。

しかし、劇中、イアーゴウの目に、オセローという人物がどのように映っていたのか、又、イアーゴウに成り代わって副官への昇進を手にしたキャシオという人物がどのように映っていたのか。そして、若く美しいオセローの妻デズデモナは、どう映っていたのか、そうしたことを考えていく時、イアーゴウの言葉が俄かに真実味を帯びてくるのである。我々は、イアーゴウの言葉の表面的な意味のみならず、何故その言葉が語られているのか、その時、イアーゴウの内面にどのような感情が働いているのか、考えてみなくてはならない。「イアーゴウの昇進を阻み、その妻エミリアを弄んだ男、オセロー。」イアーゴウの目に映るオセローは本来ならば、ヴェニスの人社会において対等に扱われ、受け入れられるべき資格を持たぬ蛮族の民、異邦人ムーアである。そして、その黒い肌の故に、その醜き容貌の故に、若さと美しさ、貞節な心を備える白人の乙女の愛など報われるはずのないムーア人である。ところが現実には、そのムーア人オセローは軍人として最高の栄誉である長官の地位に昇りつめ、美しい妻デズデモナを娶って、今まさに至福の時にあった。この男を目にする時、イアーゴウは否応なく嫉妬と憎しみの感情に襲われるのである。高潔という美德、栄達と女の美と愛——それはいずれもイアーゴウとは無縁なものである。己の意に反して自ら纏った仮面の美德 honesty をもってしてもなお、手に入れる望みはなかったのである。

そして、栄達と女の美と愛という幸運に恵まれるという点においては、キャシオもまた、イアーゴウの嫉妬と憎しみの対象にならずにはすまされない。何故なら、白人であるもののキャシオもオセローと同様に異邦人でありながら、イアーゴウの知らぬ幸運を手に入れているからである。世俗的成功と女の美と愛の双方を手中にする二人の男達を目にする限り、イアーゴウは己の中に芽生えた嫉妬とそれ故の憎しみという感情から逃れることはできない。彼等二人の幸運（飲びと飲びの源）を汚し、奪うことによって僅かに、その御し難い二つの感情をなだめるより他になし得ることはなかったのである。

イアーゴウの「嫉妬」という感情を追っていく際、我々の気付く興味深い点は、それが、異質なもの（異邦人としての異質性）に対する嫌悪感と深く関わっている点である。又、彼の考える「愛」が精神的な愛とは無縁の「情欲」に過ぎないということであり、その情欲を統御するのが理性の力と考えている点である。しかし、「理性の人」と自負するイアーゴウ自身は、

その情欲という人間の本性の一面を表す感情を、理性の力によって完全に凌ぐことはならず、又、嫉妬という感情から逃れる事もできなかったのである。

注

- 1) Samuel Taylor Coleridge, *Coleridge's Shakspearean Criticism*, ed., Thomas M. Raysor, Cambridge, Mass., 1930.
- 2) Bernard Spivack は、未だに終わること知らぬ様相をみせるイアーゴウ研究を指して、次のように言っている。
「1830年、フランスの批評家 Duc de Broglie が Othello の論評を試みて遂に、“Qu'est-ce qu'Iago?” と嘆息して以来、イアーゴウにまつわる不可解さは未だ（1958年現在）解き明かされぬままである。」
更に Spivack は、近年になって（1945年）Granville-Barker が語った、「（劇中に）存在するのは “Iago” ではなくて「悪」を飽くことなく求める渴望に過ぎぬ。（no Iago, only a poisoned and poisonous ganglion of cravings after evil.）」という、イアーゴウ探求虚し、とも解することのできる言葉を紹介している。Spivack, p3. 注 (9)
Achille Charles, duc de Broglie, “De L'Art Dramatique en France,” *Revue Francaise*, XIII (1830). Harley Granville-Barker, *Othello (Prefaces to Shakespeare)*, IV, London, 1945).
- 3) イアーゴウが、劇の冒頭でオセローへの憎しみを口にした時、既に、オセローの死までも願って謀り事を企んだか否かは断定し難い。
- 4) M.R. Ridley, introduction of *Othello*, The Arden Shakespeare, first edition, 1958, reprinted in 1986.
Charles Norton Coe, chapter II, 'Aaron and Iago' in *Demi-Devils: the Characters in Shakespeare's Villains*, Bookman Associates, Inc., New York, first published in 1963, reprinted in 1965.
- 5) E.A.J. Honigmann, chapter 6, 'Secret Motives in Othello' in *Shakespeare: Seven Tragedies — The dramatist's manipulation of response*, Macmillan, first published in 1976, reprinted in 1985.
- 6) Bertrand Evans, chapter 5, 'The Villain as Practicer: Othello in Shakespeare's tragic Practice', Clarendon Press, Oxford, 1979.'
- 7) Alvin B. Kernan, "'Othello': An Introduction" in *William Shakespeare, The Tragedies, Modern Critical Views*, edited with an introduction by Harold Bloom, Chelsea House Publishers, New York, 1985.
- 8) Irvin Ribner, chapter 5, 'The Pattern of Moral Chice: Othello' in *Patterns in Shakespearean Tragedy*, Methuen & Co. Ltd., London 19.
- 9) Bernard Spivack, chapter 1, 'Iago' in *Shakespeare and the Allegory of Evil: The History of A Metaphor in Relation to His Major Villains*, Columbia University Press, New York, 1958.
- 10) A.C. Bradley, *Shakespearean Tragedies*, 1904.
G. Wilson Knight, *The Wheel of Fire*, 1930.
Helen Gardner, 'The Noble Moor,' *British Academy Lecture* 1956.
F.R. Leavis, 'Diabolic Intellect and the Noble Hero: or the Sentimentalist's Othello' first in *Scrutiny* 6, (1937-38), then in *The Common Pursuit* (London, 1952), rep. in John Wain ed., *Shakespeare, 'Othello', A Casebook*, (London, 1971).
- 11) Dieter Mehl, "Othello" of the third chapter, *The 'Great' Tragedies in Shakespeare's Tragedies, An Introduction*, Cambridge University Press, 1983.
- 12) "Moorishness" という表現を用いて、オセローのムーア人としての本質を表そうとするのは、E.A.J. Honigmann である。注 (5) を参照。
- 13) Jack D'Amico, *The Moor in English Renaissance Drama*, University of South Florida Press, 1991, part II, chapter 6, 'The Moors of Venice'.
- 14) Bernard Spivack は T.S. Eliot の言葉を借りて、イアーゴウの憎しみや悪の動機の追及の実り無さを表現しようとしている。“Iago's hate is subject to the same comment that T.S. Eliot makes about Hamlet's grief — it lacks an “objective correlative.”” Spivack, p16, 注 (9) を参照。
T.S. Eliot, "Hamlet and Problems", in *The Sacred Wood*. (London, 1920)
- 15) Irvin Ribner は、イアーゴウを端的な表現で次のように表している。“Iago is the dramatic symbol of jealousy itself.” p94. 注 (8) を参照。
- 16) *Othello*, Act III, 3, 167-169.
イアーゴウは、嫉妬という感情にはゆめゆめ、侮られぬよう用心なさいませ、とオセローに警告する。Iago. “O beware, my lord, of jealousy: / It is the green-eyed monster which doth mock / The meat

it feeds on.”

- 17) ロデリーゴという人物は、種本である Cinthio の物語には登場せず、Shakespeare の全くの創造であると言われている。Girald Cinthio, *Hecatommithio*, 1566.

Shakespeare の *Othello* に登場するロデリーゴは、デズデモナを愛し、イアーゴウに彼女への贈り物として金品を託して仲介の労を頼み、その愛を勝ち得んとする。だが、オセローとデズデモナの秘密のうちに執り行われた結婚を知り、オセローを憎むことになる。従って、オセローへの密告は無いものと安心してか、イアーゴウはロデリーゴを相手に本心（オセローへの憎しみと復讐の意図）を明かすのである。又、興味深い点としては、ロデリーゴは劇中、唯一人イアーゴウの二枚舌に気付き始め、劇の終盤において一度は糾弾することであろうか。尤も、彼は再びイアーゴウの言葉に欺かれ、その手にかかって命を絶つことになる。

- 18) オセロー、デズデモナ、キャシオ、この三人の人物と人間関係に対するイアーゴウの見方を総合すると、そこには、男女の相違、白人か否かの相違、外観の美醜の相違、そうした相違に関わらず、人間の本質を端的に表すのは、獣性に通ずる肉体 (lust) にあるという人間観が浮かび上がってくる。又、イアーゴウによれば、そのような本質によって支配される人間ひとりひとりの間に差異をもたらすのは、理性の力である。(第一幕三場313-324、ロデリーゴとの対話) 逃れ得ぬ lust の勢いを理性と意志の力によってどれほど統御することができるか、そこに決定的な相違が生まれるのである。そしてイアーゴウこそは、理性の人であるという自負心を支えに他を優越し、侮蔑せんとする人物である。イアーゴウの侮蔑は別として、イアーゴウの人間観には、「人」のみに備わるとする「理性」を有しながら、時として感情や本能的欲求に屈する人間の本質を現実として知る、作者シェイクスピアの目を感じさせるものがある。

- 19) 実際には、ヴェニス法として白人とムーア人の結婚を禁じていたわけではない。(Jack D'Amico による歴史的説明を参考にした)

- 20) 当時、イタリア社会（ローマとヴェニス）が、異質なものに対して政治的軍事的必要性から、受容性と排他性（閉鎖性）という相反する二つの態度を見せていたことを、Jack D'Amico が指摘している。

“While open to outsiders, these cities — one synonymous with the great triumphs of the ancient world and the other with the city-states of the Italian Renaissance — retain a clearly defined sense of their cultural, racial and political origins. The contradiction is perhaps, a measure of the difference between the original republic, with its tightly knit sense of citizenship and the empire, which must include foreigners and expand citizenship as it expands. In such cities, as represented by Shakespeare, there is an inherent contradiction in the way Moors are perceived.” p177. 注 (13) を参照。

- 21) フローレンス人に対するヴェニス人の見方に関しては、大修館シェイクスピア双書 *Othello* (笹山隆 編注。1989年) の後注を参考にした。

- 22) *Othello*, Act VI, 3, 58-101. ここでのデズデモナとエミリアの対話は、デズデモナにとって「貞節」という美德がどれほど重要な意味を持っているかを端的に示していると言ってよいであろう。

「世に、不義によって夫を裏切るような、そんな女がいると思う、エミリア？」と問うデズデモナに、「中には、そんな女もいるに違いありませんよ。」と、事もなげに答えるエミリア。半信半疑のデズデモナは、「お前なら、どうする？」と尋ねて再度思いがけない答え、「世界を全部引替えにやろうというなら、考えますわ。」という言葉を得て仰天し、自分ならばどんなことがあろうとも夫を裏切るなど考えられぬ、と明言するのである。

注目すべきは、デズデモナが「まさかお前、そんなことはしないでしょう？」という意味を込めて “Wouldst thou do such a deed for all the world?” という表現を繰り返している点である。“No, I would not” という言葉をエミリアから早く引き出して安堵したいかのように。だが、エミリアは女の立場を弁するに忙しく、なかなか譲らない。そして、デズデモナは自ら、“No, by this heavenly light” (63)、或るいは、“Beshrew me, if I would do such a wrong for the world.” (74-75) といった言葉で「貞節への信念（堅持）」を宣言することになる。又、デズデモナは、“adultery” といった直接的表現を取ることができず、“such a deed”, “such a wrong” という婉曲表現を用いて「不義」を表そうとしており、その点は、やはり貞節な女性の証しであるかもしれない。更に、その婉曲表現には、“purity, chastity, modesty” といった美德を表す言葉によって象徴すべき女性像が、デズデモナ自身の言葉で表明されていると言ってよいであろう。

- 23) 注 12) に挙げた E.A.J. Honigmann の言葉を始めとして、Dieter Mehl や Jack D'Amico の言葉もそうした見方を端的に表している。

Dieter Mehl, “the barbarian passions within himself [Othello]” (p73)

Jack D'Amico, "[Othello] returns to the reality of his own sullied flesh", "he is quick to revert to primitive or savage instincts" (p190, p192)

- 24) *Triulus and Cressida* に関する拙稿, "Frailty, Thy Name is Cressida" を合わせて読んでいただけると幸いです。1991年, 広島大学文学研究科大学院生英文学会研究論文集, *Phoenix*, 第36号に投稿した論文です。
- 25) *Othello*, Act I, 1, 379-380.
イアーゴウは, キャシオのことを, いかに女を惑わし過ちを冒させはせぬかと人が疑ってみたく
なるような, そのような容貌と身のこなしを備えた男だと言っている。
"He hath a person and a smooth dispose/ To be suspected, framed to make women false."

その他の参考文献

1. Robert B. Heilman, chapter 3, "The Iago World — STYLES IN DECEPTION", in *Magic in the Web: ACTION & LANGUAGE IN OTHELLO*, University of Kentucky Press, Lexington, 1956.
 2. Bernard Spivack, chapter 12, "Iago Revised" in *Shakespeare and the Allegory of Evil: The History of A Metaphor in Relation To His Major Villains*, Columbia University Press, New York, 1958.
 3. Jhon Holloway, chapter 3, 'Othello' in *The Story of The Night: Studies in Shakespeare's Major Tragedies*. University of Nebraska Press, Lincoln. 1961.
 4. J.M. Gregson, chapter 5, *Othello in Public and Private Man in Shakespeare*, Croom Helm Ltd., USA, 1983.
- ** テキストは, *The Arden Shakespeare, Othello*, edited by M. R. Ridley a University Paperback edition first published in 1965, reprinted in 1986, Methuen, London and New York. *The New Cambridge Shakespeare, Othello*, edited by Norman Sanders. first published in 1984, reprinted in 1989.
尚, テキストからの引用は, *The New Cambridge Shakespeare, Othello* から用いたものである。

—平成9年9月24日 受理—